

### 子ども達は今?



6月24日、地域ケア会議が開かれ、町会長、福祉関係機関、一般住民など28名が参加し、子ども達の現状を話し合いました。

こども福祉課から子どもの貧困、児童虐待などの報告を受け、グループワークで現状を探りました。

### ▽児童虐待

実態は見えにくいですが、「ベランダの泣き声」など気になる事例を交換し、許しがたい気持ちを共有するグループもありました。「松本でも550件の相談がある」、「当事者には解決能力がない」との福祉課の報告も印象的でした。また、暴言や無視や夫婦喧嘩など心理的虐待が増えていくことを知る機会でした。

### ▽子どもの貧困

「子育ては親の自己責任」という理解が強く、特に「ひとり親家庭」に貧困が潜在し、コロナ禍で余力のない生活を送る子ども達が増えているといえます。低所得の家庭では、子どもの進路ビジョンがもてないという調査報告もありました。



### ▽子ども達の現状

一 表面的には元気でも、コロナ不安は浸透し、粗暴・差別的言動が増えている。  
二 ここ数年で子ども達の姿が見えなくなり、接触の機会さ

えない。接点としての伝統行事も少子化で消滅の危機を迎えている。  
三 学校や家庭以外で接点の多い児童センターや保育園の役割を確認し、「地域の方々の声掛けが娘を育てた」という報告に感銘したグループもありました。  
次回は、地域でできる対策を話し合います。

## シリーズ 戦後の松南地区 その1

### インタビュー 松本製紙株式会社 編①

敗戦間近、松本は「軍事の町」でした。松本南部にも日本ステンレス、宮田製作所、石川島芝浦タービンが疎開し、畑地や荒地は軍需工場に变身したのです。戦後はその跡地に企業や住宅地が築かれ、今日の基礎ができました。

Q 元社員だった原元勝さん、馬場雄治さんから伺いました。

Q 松本製紙とは、どんな会社ですか。

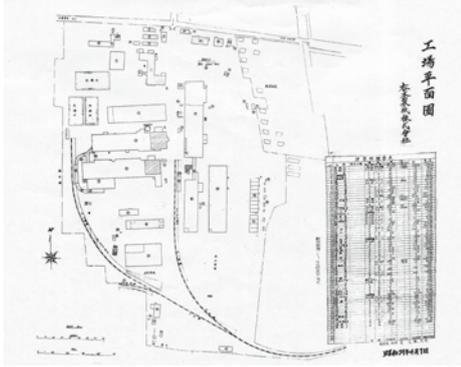
原 東京毎日新聞直営の製紙工場で、昭和27年創業です。

馬場 朝日新聞と双壁をなしていました。その半数を松本で作る、毎朝貨車10両で東京竹橋の本社屋に納入していました。

原 今のやまびこ道路から駅前通り、線路から住建前通りに囲まれた日本ステンレスの広大な跡地でした。その本体部分を活用した工場です。鉄道の引込線も利用しました。

当時の工場の配置図は私が書いたもので、寄贈します。

### 松本製紙株式会社 工場平面図



Q 活気ある会社ですが、立地条件が良かったのですか。

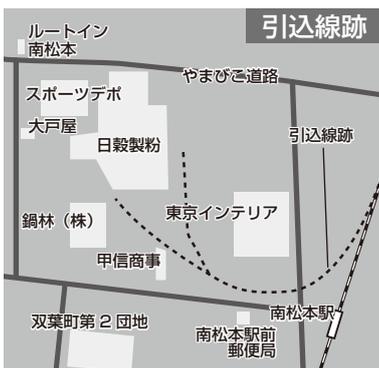
原 工場・鉄路の他、パルプの原材料の赤松があり、地下水も豊富でした。松本市の誘致もあつたようです。

馬場 揚水量は、当時の市民使用量と同等と言われていました。従業員は600人で、地元の井川城・出川町・並柳の人達が、6割いました。

原 給与は、松本ではトップクラスでした。創立記念日には、会社役員はヘリコプターでやってきて、祝賀記念にはプロ野球の毎日オリオンズも来しました。現在の東京インテリアに市営球場があり、私も近隣企業と親睦試合をよくやりました。

馬場 中央公民館が焼失した際、グランドピアノを寄贈しました。重役用にゴルフ練習場も作るなど、多方面で話題にされた会社でした。

### 引込線跡



# 町会模様



## 町会の成り立ちと親睦

南松本一丁目町会は、昭和23年の軍需工場の閉鎖に伴う南松本町会の発足に始まります。その後、29年、分町し、南松本一丁目・二丁目町会が誕生し、36年5月、松南地区で最初の公民館が創立されました。なお、公民館は、市内の製糸工場を移築したもので

創立から70年余り、南松本保育園、信濃むつみ高校、市営団地、マンションなど町会の様子は著しく変貌しました。しかし、住民の親睦への思いは引き継がれ、以前は盆踊り、運動会も行われました。最近では、仲間同志のサークル活動が期待されています。地域の振興と住民生活の安定を地道に進めています。

(児嶋 正武)



## 花は心の癒し

双葉南町会では、毎年6月の一斉清掃後に、花のポット苗が配られ、各家庭がプランターで育てています。でも、事情があり管理ができない家庭の分は、他の住民が育てています。

町内にある公園には遊具が設置され、以前は賑やかな子ども達の声が聞こえていました。今では老朽化が進んだ遊具の一部は撤去され、役員の方の労力で土を入れ替



え、花壇に様変わりしている場所もあります。また、花の育つ場所には率先して住民の方が花を植えられ、今はそれぞれの場所での癒しとなっています。これも陰の力となって活躍されている方々のお力添えがあるからです。

(村口 淳子)

# リンゴ園で



車で移動し、独り黙々と指先を動かす。「菓ごもり」とは少々違う気もしますが、他人との濃厚接触はありません。近郊のリンゴ園に、摘果のお手伝いに行っています。

リンゴは、一輪の中心花と最多五、六輪の側花が咲き、結実します。その中の大粒で器量よしの実を一粒残し、あとは全て摘み取ってしまします。養分を集中させるため、大きく育てるため

# 「コロナ禍」私の菜園



数年前より自宅店舗前の花壇で、トマト・キュウリを育てました。一昨年、商売を閉じ、裏の二棟の工場を壊し、30数坪の土地が

# 菓ごもり生活？



す。摘果のこの時期、農家は、猫の手も借りたい忙しさなのです。カッコウや揚げ雲雀の音が響く空の下で一日を過ごしていると、コロナ禍を忘れてしまいそうです。

(石川 博子)

更地となりました。草だらけも悲しいので、昨年より一面を使い、キュウリ・トマト・ナス・ネギの菜園を作りました。

昔からバジルを育て、バジルソースを友人や知人に差し上げ好評でしたので、本年は10株も植えてしまいました。夏には畑の土が入る予定ですので、今年はこの限界。少し遊びのつもりで、大変高価な畑です。

(百瀬 壽)

# コラム松南

## ●花のある風景

町内を歩いてみると、周辺を花の植栽で飾っているお宅が何軒もありました。松本市が「花いっぱい運動」発祥の地であることを改めて思い起こすひと時です。

昭和27年4月8日、松本市小学校教員の小松一三夢氏によって始められたこの運動は、「社会を美しく、明るく、住みよくする」との願いを込めて、69年経過した今も全国で活発に行われています。



一昨年、信州スカイパークをメイン会場として開催された、「信州花フェスタ」は記憶に新しいところです。丹精込めて育てられた一輪の花の姿に、誰もが感動と癒しの時間を共有したのではないでしょうか。

コロナ禍ですが、花を育て、観る中で感ずる穏やかな気持ちを大切にしていきたいと思ふこの頃です。(近藤晴彦)